

日本臨床薬理学会海外研修員報告書

－研修経過報告書 第2報－

島本裕子

Department of Clinical Pharmacology & Toxicology

The Hospital for Sick Children

1. はじめに

カナダ，トロントの Division of Clinical Pharmacology & Toxicology, The Hospital for Sick Children (SickKids)において伊藤真也先生のご指導の下，research fellow として2018年4月から研修を開始し，1年が経過しました．

2. 研修内容

現在私は，病態が薬物の体内動態に及ぼす影響についての臨床研究に取り組んでいます．研究の実施においては，多様な視点からの考察を丁寧にご指導してくださる伊藤先生をはじめとし，研究計画書の倫理委員会への提出，カルテ閲覧や研究用データベースを使用するための手続きなど研究遂行のためのマネジメントを含めた幅広いサポートをしてくださる **clinical research coordinator**，カルテからのデータ収集を手伝ってくださる学生の方々，部門の **meeting** で研究の進捗状況や考察についての私のプレゼンテーションに対して異なる視点からの指摘や建設的な意見をくださる **staff** や **fellow**，本当に多くの方々に支えていただいています．ある時，臨床研究について **clinical research coordinator** の方とお話をしていた際に「臨床研究はチームで，みんなが協力し合ってゴールを目指すもの」という言葉を聞き，非常に感銘を受けました．日本で臨床業務をこなしながら私自身が主任研究者として臨床研究を実施していた時は，研究計画書の準備や倫理委員会とのやり取り，カルテからのデータ収集など，研究に関わる事柄は全て自分であるべきものだと思っていました．しかしながら **clinical research coordinator** である彼女のこの言葉を聞いて以降，私自身の意識には変化が生まれ，**meeting** でのプレゼンテーションの際の主語も”I”から”We”へと自然に変化しました．また，データ収集を手伝ってくださった学生の一人は母国で小児科医として長年のキャリアを持つ方でしたが，彼女から「私は母国で多くの小児患者を診てきたのでこの研究目的は自分の経験からも納得できるし，小児患者のために必要な研究だと思う．カルテからデータを集めることでこの研究に貢献できて嬉しい．」というコメントを聞くことで，私自身の研究遂行に対する思いもより強くなりました．

SickKids では 2018 年 7 月に電子カルテ運用が開始されましたが、それ以前のものは紙カルテをスキャンしたものが電子的に保管されています。そのため、日本で電子カルテに慣れていた私はデータ収集を開始した当初、予想以上に時間がかかってしまっていました。特に重症チャートや医師の診療録は癖のある手書き文字の判読に苦勞することがありましたが、データ収集を手伝ってくださる学生の方が瞬時に判読してくれ、本当に助かりました。こちらの division では clinical research coordinator の実習生としてこれまでに 4 名の学生の方とお会いしたのですが、それぞれの出身国はリビア、バングラディシュ、パキスタン、チベットなど様々ではあるものの、全員が医師出身だということに非常に驚きました。母国では医師として働いておられた方が、カナダに来て college に入り直し、clinical research coordinator を目指すことが多いということを身を以て知りました。中には母国の臨床現場で指導的立場だった方もおられ、時には学生の方から学ばせていただきながら研究を進めています。またデータ収集の際、カルテで治療経過を追う中で、薬物血中濃度のコントロールがうまくいかない症例では医師が薬剤師にコンサルトし、薬剤師が TDM に基づいた推奨投与量をカルテに記載しているのを見かけることがありました。このような記載を見ると、自分自身の日本での仕事を思い出すとともに、SickKids でも薬剤師が活躍していることを垣間見ることができ、嬉しく思いました。

現在は、収集したデータを用いて非線形混合効果モデルによる予備的なデータ解析を開始しています。試行錯誤しながらの解析ですが、薬物動態のモデルや誤差について一つ一つ丁寧に検討しながら解析を進めることで自分自身の勉強にも繋がっており、興味を持つ分野において新しい知識・考え方を体得することに楽しみを感じながら研究を進めています。

3. トロントで感じるダイバーシティ

カナダは多文化主義を国の方針として掲げており、トロントの生活においてもダイバーシティが推進されているのだと感じる機会が多くあります。私は通勤に地下鉄を使っているのですが、当初驚いたのが通勤電車に乗る女性の多さでした。日本で通勤電車に乗ると、女性専用車両以外ではスーツを着用した男性の乗客が圧倒的に多かったことが記憶に残っているのですが、トロントの地下鉄ではもしかして半数程度はいるのではないかと思われる程多くの女性が乗車しています。また、SickKids においても女性の職員数は非常に多いと感じています。日本では女性の社会進出が依然として課題ですが、その点でカナダは大きく進んでいる印象を持ちます。またダイバーシティ推進において、女性だけでなく、すべての人種、宗教に寛容であり、移民の受

け入れにも積極的なカナダでは多くの国の出身者と交流することができます。トロントで生活してきた約1年間、仕事やプライベートを通じて今まで日本で生きてきた数十年間では出会うことのなかった多くの国の方々と知り合うことができました。彼らと話をすることで、日本で自分が常識だと思っていたことが異なる視点から見るとそうではないこと等、新たに気付くことも多くあります。トロントで生活する中で、幅広い視野と柔軟な思考を持つことができれば嬉しく思います。

4. 終わりに

この冬は当初暖冬と予想されていましたが、その後一転し、例年よりも寒いという予報となりました。私はトロントでの初めての冬を越しましたが、大阪出身の私にとって体感温度-20度や街中でダイヤモンドダストが輝く光景は人生初体験でした。最近は気温がマイナスに下がることはなくなり、春が少しずつ近づいてくるのを感じる日々です。引き続き何事にも興味を持ち、より多くのことを学ぶことができるよう研修を続けたいと考えております。